

ポンデュガール

Bridges of the World

フランス・ニーム近郊



国連・2006年発行

フランス南部、ニームの近くに古代ローマ時代の巨大な石造りの水道橋、ポンデュガールが残されています。この橋はローマの植民都市であったネマウスス、現在のニームへ水を送るために造られた水道施設の一部です。水道はウールの水源地から延長50kmにも及ぶものですが、その高低差は17mしかありません。途中でローヌ川の支流であるガルドン川の渓谷を越える必要があるために長さ300m強、高さ約50mの水路橋が架けられました。

石橋は3層からなり、1層目は長さが約140m、幅は6m強で、6連のアーチからなり、最大スパンは24.4mです。2層目は1層目とほぼ同じスパンで、11のアーチが連ねられています。3層目は2層目のアーチの上にスパンごとに3～4つの小さなアーチが載せられており、現在およそ270m、35連のアーチが残っていますが、元は350mほどの長さがあったようです。頂部には幅約1.2m、高さ1.8mの水路が設けられていて、かつては1日20万トンの水を流すことができたと言われています。

石材は現場から700mほど離れたところから切り出され

たライムストーン、やわらかで化石を含んだ石灰岩が使われていますが、黄みがかかった色が特徴で、光を浴びた橋全体を華やかに見せています。橋の構造は、ローマ時代に一般的であった半円アーチで、石材が空積みされていますが、上層の水路部には水漏れを防ぐために火山灰と焼石灰を混ぜたモルタルが充填されています。

この水道橋は、古代ローマ時代のアウグストゥス帝の腹心で、ガリア地方の総督であったアグリッパによって紀元前19年に建設されたとされてきましたが、近年の研究から、紀元後1世紀半ば、40～60年に造られたとする説が出されています。

ガール水道橋はローマ帝国崩壊後、次第に使われなくなって、荒れるに任されていたが、18世紀頃からその価値が評価され、修復の手が加えられるようになりました。そして1985年に世界遺産に登録されました。

18世紀に旧橋に接して下流側に人道橋が架けられたために橋を間近に見学できるようになっていますが、古代の姿は上流側からしか見ることはできません。



撮影：松村 博